2014年11月1日発行

ニュースレター No.36
News Letter
INSTITUTE FOR THE STUDY OF CHRISTIANITY AND CULTURE

キリスト教と文化研究所への期待

学長　理工学部教授　規矩 大義

アドヴェント点灯式やクリスマス礼拝、学院クリスマスコンサートなど、キリスト教系の学校らしいお知らせが、キャンパス内に溢れる季節になりました。キャンパスが一番華やかになるクリスマスをお慶びしたいと思います。

学院内にはキリスト教関連の諸行事を執り行い、各校のキリスト教教育に関する活動を支援することを目的とした関東学院宗教センターや大学宗教教育センターがあります。一方、キリスト教と文化研究所は、その目的に「キリスト教との関連において、広く人文科学、社会科学及び自然科学にわたって、学術の理論及び応用に関する研究を行い文化の創造と発展に寄与する」と記載された大学附置の研究所です。

中高以下の各校の児童、生徒にとっては日々の礼拝や聖書科の授業を通してキリスト教の教えに触れる機会が数多くありますが、大学では「キリスト教学」などの座学の受講以外にキリスト教を学ぶ機会は決して多くはありません。学生のキリスト教に対する理解もさまざまです。勿論、本学の理念にもあるように、教育の基本的なスタンス、教育方針や学生に対する想い、各種行事なども含めて、キリスト教を基にした教育を全教職員が心がけていることは言うまでもありません。

しかし、研究を通してキリスト教への理解を深めることが出来るのは大学ならでは、そして関東学院大学ならではだと考えます。それもキリスト教研究だけではなく、キリスト者もそうでない者もともに、さまざまな分野において、学問とキリスト教との関わりや宗教的解釈、キリスト教の精神に基づく研究・実践活動などを広く学内・学外に公表することができるのが「キリスト教と文化研究所」の活動だと考えています。そうした意味でキリスト教と文化研究所にはより一層学生に近い位置で、学生たちに身近なテーマで、各学部と協調して、関東学院にしか出来ない教育研究活動を進めていただきたいと期待しています。

古都西安にみる絲綢の路

ヘブライズム研究グループ西安調査活動報告

２０１４年、ヘブライズム研究グループは西アジアより東に向かい、中国に到達した一神教にヘブライズム伝播の礎を求め、新たな一神教研究プロジェクトを開始した。そのため、この11月には中国西安交通大学との合同調査チームを作り、古都西安にその調査の足を延ばした。かつて西安は長安とよばれ、西域の多種多様な民族が行き交い、同時に様々な文物と思想が人々により持ち込まれた首府である。現在の西安には古代キリスト教の一派、ネストリウス派一景教の石碑、そして回教徒の寺院と信徒たちが残り、一神教が趨勢を誇った唐代の様子を今に伝える。

西欧や北米を経由してアジアに伝播された一神教とは異なる経路を辿ったこの教徒たちが、アジアの険路を旅し、持来した信仰とはどのような思想であったのか。また一千年のときを超え、その眠りから目ざめた石碑は私たちに何を語り、何を問うているのか。日中の大学が協働で挑んだこの調査の概略をここではまとめることにする。

人を包み、輝きを放つ絹。その美しさは能の装束にも発揮され、舞うごとに、優雅にたなびく。驚くほど軽く、柔らかく、優しく、そして美しい絹は古今にわたりて人々を魅了した。かつて絹は中国から地中海世界に運ばれ、その交易路は「シルクロード」とよばれた。この絹の道は町と町、人と人、文化と文化を結び、絹はもとより、陶磁器、香料、茶、漆器、紙などが西に運ばれ、西からは宝石、ガラス製品、銀製品、絨毯、イスラム陶器などが運ばれたという。

駱駝の背に載せられ、砂漠を越え、オアシスを繋いで運ばれたのは高価な珍品、奢侈品だけではなかった。東西交易の担い手といわれた中央アジアのソグド人商人はシルクロードに点在するオアシスにコロニーを形成し、ネットワークを張り巡らした。この情報網の上を縫うようにして、様々な思想、宗教も伝播したのだった。それは仏教、ゾロアスター教、マニ教、ミトラス教、そしてイスラム教、キリスト教であった。

古代キリスト教ネストリウス派と景教

「景教」とは、小アジアのシリア人ネストリウス（Nestorius 386-451）を開祖とし、マリアを神の母と認める伝統的教義に反対した宗派であるネストリウス派の中国名である。431年、エフェソス公会議において主流派から異端とされ、主教ネストリウスとその支持者たちは追放された。その後、彼らはササン朝ペルシア王国に身を寄せ、498年に自らの教会を建て、セレウキア・クテシフォンに本部をかまえるに至った。アッバス朝建国の後、主教座をバクダッドに移し、王国内での隆盛を極めた。その後イスラム教の台頭に合わせ、中央アジアへと東漸の旅を始め、ソグドなどの遊牧民族と交易商人たちに信者を増やした。

ソグド商人たちはソグディアナのオアシス都市サマルカンド、ブハラを中心に東西交易を盛んに行い、ネストリアンとして東への伝播を担った者も多い。6世紀にはネストリアンの宣教師が北魏の首都洛陽に至ったとされ、彼らが蚕をビザンツ帝国にもたらし、その後はじめてヨーロッパでシルク紡績が行われるようになったという。当初は民間人へ布教された景教だが、635年(貞観9年)唐高宗の時に、ペルシャ人宣教師アラボ

「大秦景教流行中国碑」頭部にに刻まれた十字架と文様
ネストリウス派・景教徒は裾が広い十字架を使用した。6〜7 世紀にインド、中国に伝道されたというキリスト教では「十字架」に「蓮華」が組み合わされることが多く、アジアの宗教とキリスト教が融合した証と分析される。

ン（阿羅本Alieben）による宣教団が長安に朝廷の厚遇をもって入城し、唐太宗により景教寺院「大秦寺」が建立された。

しかし845年（会昌5年）唐武宗が外来宗教への弾圧として廃仏運動を起こし、ゾロアスター教、マニ教と並び唐代の「三夷教」と称された景教は壊滅的な被害を受け、中原からその姿を消した。その後、モンゴル高原中北部ケレイト族やウイグル族などの遊牧民族に末裔が生き残り、フビライ・ハーンの母親ソルコクタニ・ベキ（Sorghaghtani Beki1204-1252）がケレイト族のネストリアンであったように、モンゴル帝国形成にも少なからず影響を及ぼした。

「大秦景教流行中国碑」

2014年11月、日本を出発した調査チームは中国側メンバーと合流し、陝西省西安市内西安碑林博物館を訪れた。ここには1623年（天啓3年）（1625年という説もある）に突然出土した「大秦景教流行中国碑」が保管されている。同碑は高さ約270cm、幅約100cm、厚さ約28cm、黒色の石灰石で出来ており、題額には「大秦景教流行中国碑」とあり、その上部にはネストリウス派の特徴である末広がりの十字架が線刻され、特異な雰囲気を見せる。碑文は上品かつ格調高い漢字で彫られ、32行、毎行62字、計約1900字からなるが、その他に当時ペルシャ人宣教師たちに使用された古体のシリア文字が若干刻まれている。

調査チームの中国側メンバーである西安市文物保護考古研究員張全民博士によると、碑文はペルシャ人宣教師景浄の撰で、書は書家呂秀巌による。新約旧約それぞれからキリスト教の教義を述べた後、太宗が宰相房玄齢に儀仗兵を伴って阿羅本を出迎えさせたこと、景教奨励の詔勅、玄宗皇帝も景教を保護したことなどが記されている。景浄とはインド僧般若三蔵が『大乗理趣六波羅蜜多経』を翻訳する際、協力を仰いだ「波斯僧景浄」である。また空海は般若三蔵からサンスクリット語を学び、空海の長安での住居地西明寺や般若三蔵の醴泉寺は景教寺大秦寺に近いことから、空海が般若三蔵を通して景浄に会い、景教に触れたのではないかと推察できるという。

現在までに発見された景教碑はこの「大秦景教流行中国碑」と2006年に河南省洛陽市で発見された「景教経幢」の2本だけである。ソグド人墓碑に詳しい張博士によると、西安の「大秦景教流行中国碑」は当時教勢を極めた景教教団が建立し、布教の経緯や政府との良好な関係を伝える記述が多く、王朝への配慮が強くあらわれている。しかし既存の仏教や道教に対しては逆に否定的な表現がある。対し、洛陽の「景教経幢」は帰化したソグド人商人の一家の墓碑であり、キリスト者としての家族への労りや望郷の想いが読み取れるという。また仏教への配慮が大きく、戒名と思われる氏名の記述もあるという。

「大秦景教流行中国碑」
唐代781年（建中2年）にペルシャ人宣教師伊斯が建立した。845年道教に傾斜した武宗皇帝による宗教弾圧（会昌の廃仏）から逃れるために地中に埋められたという。出土したのは、埋没から約800年後の明末の長安。

ミナレット「省心楼」
礼拝時刻の告知（アザーン）を行う塔であるミナレットは八角形の瓦葺き、木造建築であった。

化覚巷 清真大寺

次に調査チームが向かったのは西安市内の鼓楼の西北にある中国最古のモスク清真大寺だった。かつて長安には西域から多数の回教徒が訪れ、商人として賑わいをみせる一方で、唐代には多数の寺院を建立し、布教につとめた。同寺院は1300年の歴史を誇り、世界でも珍しい、瓦葺の大屋根をかけた木造のモスクである。

同寺は化覚巷（Hua jue Lane）という回教徒居住区の中にあり、この付近にはかつて「西市」とよばれ、西域からやってきた商人たちで賑わう市場があった。寺境内は高い塀で囲まれ、50m×250mという長大な敷地（12000㎡）を持ち、メッカに向く中心軸の両側にシンメトリーな建物群が配列される。山門から最奥の礼拝堂までは4つ中庭（進院）に区画され、第3進院に「省心楼」と呼ばれる明代に建てられた三層の八角堂があり、これがミナレットの役割を果す。

偶像を置かず、アラビア語のカリグラフィーが随所見られることを除けば、他の宗教の寺院との違いは無いが、道教や仏教に見られる、ある種の派手な装飾は無い。樹木の多い静謐な境内は格調高く、コーランを唱える声が朗々と響く。僧侶たちの顔立ちは皆、生粋の中国人であり、イスラームの帽子をかぶり、僧衣をまとう者もいる。継起する庭と特異な建築様式がみごとな調和を見せる。

寺院に勤める阿卜杜拉・哈克穆（Abdu llah Hake Mu）は次のように答えた。「中国にイスラームが伝えられたのは、唐代で、主として交易活動を通じてである。景教が消え、イスラームが残ったのは弾圧されたとき、アラビアから援軍がやって来て、イスラームを助けたからだと聞いている。歴史上、イスラームによる征服や政権ができたこともないので、中国全体がイスラーム化したこともない。そのためマイノリティとして、信仰を保つことが困難な時期もあった。イスラーム教徒の回族は漢族との通婚によって同化したが、信仰とそれに伴う習慣によって、今はひとつの、別個の民族として扱われている。西安の清真大寺は、我々中国のイスラームにとって非常に大きな存在だ。」

境内の随所に見ることが出来るイスラミック・カリグラフィー

寺院に勤める阿卜杜拉・哈克穆にインタビューを試みる調査チーム。中央は西安交通大学外国語学院通訳の王菁。

ユーラシア大陸にあまたある国々の中で、絹をつくり輸出した中国。その絹はソグド人たちによってはるかヨーロッパへと運ばれ、人々に未知なる土地への好奇心を育て、やがて次なる大航海の時代へ向かう気運を醸し出すことになった。信仰の新天地を東方に求めた一神教信徒、交易の担い手として、ネットワークを築いたソグド人、そして大きな野望をもって、彼らを迎え入れた中国人たち。ユーラシアの東西を結びながら育まれた、彼らの知恵と文化は、国や民族の姿がかわり、消え失せた後にも歴史を動かし続け、確実に次の時代の扉を開いていったのであった。現に西安はそのエキゾチックな雰囲気と至る所に残された唐代の遺物をもって、訪れる多くの人々を魅了し続ける。古の東西交流によって生まれた恵みは古都の地にしっかり根を張り、人々の暮らしを力強く支え、互いに分かち合う歴史を今も築き続けていると、調査を終えた私たちは確信した。

New Face

研究所員としての抱負

理工学部・専任講師　尾之上 さくら

本学に2009年に赴任し、今年から本研究所の所員として、「いのちを考える」研究グループの一員に加えて頂きました。キリスト教の精神に基づいた本学の教員として、また本研究所の所員として教育や研究に携われることに感謝しております。

キリスト教と出会いましたのは、プロテスタント・バプテスト派の女学校の中学部に入学した時でした。卒業後はキリスト教にふれることはありませんでしたが、聖書の言葉は苦しいことや悲しいことがあった時に私の心の支えとなりました。

現在は理工学科の生命科学コースに所属しており、細胞生物学を専門として研究、教育を行っています。培養細胞を用いて種々の生命現象の解明を行っていますが、人工多能性幹細胞が人の病気の克服に貢献するようになってきた今日において、その安全性に加え生命倫理の問題や、生命科学の進歩と生命の尊厳などについても検討する必要があるのではないかと考えています。

私は生命科学の観点から「いのち」について考えていきたいと思っています。先生方が取り組まれている「いのち」に関する研究について勉強させて頂きながら、私自身の研究テーマに対して地道に取り組んでいきたいと思います。今後ともご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

互恵（レシプロシティー）と国際交流：キーワードで読み解く〈社会・経済・文化史〉

クロス文化学叢書第１巻　矢嶋道文編集責任　クロスカルチャー出版　2014年9月

本書は本研究所にて長年所員をつとめられ、「坂田祐研究」プロジェクトを推進された、矢嶋道文文学部教授が編集の責任を担った論考集である。21世紀における「国際交流」のあるべき姿を探し求め、矢嶋教授のもと15名の研究者が「互恵（レシプロシティー）と国際交流」における歴史像を鮮やかに描く。

分野を超え、快速で、説得力のある15編の論考は、古代から現代までの互恵的国際交流史を、各々の著者が独自の視座から俯瞰し、その考証を惜しみなく開陳したものだ。グローバリズムが進み、市民社会の確立と共生が叫ばれる今、恵みの分かち合いと異文化理解の針路を解する論著として期待される１冊である。

関東学院大学　キリスト教と文化研究所
〒236-8501横浜市金沢区六浦東1-50-1
TEL：045－786－7873（研究所直通・月～金9：30～17：00）
FAX：045－786－7806（研究所直通・24時間受け付）
E-mail:kgujesus@kanto-gakuin.ac.jp

発行者：渡部 洋
Director: Hiroshi Watanabe